

① 子どもたち一人ひとりが大切に愛されていると感じられる養育を追求します。

発達に課題のある子どもが増加している中、一人ひとりの発達段階に応じた療育支援や病院受診をきめ細かく実施し、助言された内容を写真も含めた記録として見える化を図ることにより、かがやき職員全体に周知し養育に生かされている。

また職員育成担当システムを整備し、初任者職員だけではなく職員全体で「子どもが大切にされる養育」という視点を確認しながら、職員育成の取り組みを充実させることができた。

反面、評価を取り入れることで「養育の仕事に向いていない」ことを振り返りの中で自覚し結果的に退職となる職員があり、育成にかかわった職員のモチベーションをどのように保つか考えさせられることも出てきた。

グループリーダーを中心に、子どもが心地よく過ごせる人的・物的環境についてグループ会議で検討し実践に結び付いたことや、毎月読み合せ学習を実施するなど資質向上への取り組みは評価できる。

② 家庭養育優先の原則に則り、親子関係の構築に向けた取り組みを重視します。

今年度は定期的な面会交流と家族面談を大切にとらえ、親子の愛着形成を大切にしようと新年度を迎えたが、コロナ禍における2度の緊急事態宣言もあり、思うように面会交流ができない日々が続いた。WEB面会を導入したり、担当者から子どもの写真を添えた手紙の頻度を増やしたり、家庭引き取りに向けて進めている家庭においては、家族の体調チェックを細かく願っている外出泊を実施するなど、親子関係の構築に取り組んだ。

10代で出産した母親を数年間に渡り支援し続け、家庭引き取りに結び付いたケースにおいては、多くの関係者の配慮の中で継続してきた面会交流、子どもへのライフストーリーワークの取り組み、母親への寄り添い等、担当保育士と家庭支援メンバーのチームで支え合いながら取り組んだ成果と感じている。母親自身が徐々にかがやきの担当職員に心を開き、念願の家庭引き取りに至ったことはとても大きな忘れられない出来事となった。今後も引き続きアフターケアに取り組んでいきたい。

③ 地域から必要とされる施設のあり方を追求していきます。

今年度から新しく産前・産後母子支援職員や育児指導職員を配置し、近隣の市町村との連携強化に取り組み始めた。その中で、特定妊婦や出産後精神的に不安定な母親など、在宅での要支援家庭にどのようにアプローチをしていくかを考えさせられた1年であった。

かがやきが開設して20年になるが、乳児院に入所するケースは要支援家庭のごく一部であり、育児のストレスやひとり親家庭で経済的にも精神的にも支援の必要な家庭への予防的な介入の取り組みなど、乳児院で働く職員の意識改革も必要になってくる。

今まで入所している子どもとその家族に丁寧に向き合い、愛着をベースにした養育の充実が業務の大半を占めていた。今後はその取り組みに加え、地域の関係機関との連携や協働を意識し、施設に入所する前の要支援家庭へのアプローチを強化する必要性が高まっている。地域支援に向けた人材育成の取り組みを重要視していきたい。